

Changes in Bear Trapping in Miomote, the Asahi Range

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005923

朝日連峰の山村・三面におけるクマの罾猟の変遷

池 谷 和 信*

要 旨 わが国の代表的な狩猟集落として知られる新潟県三面^{みへ}を事例にして、クマ狩りの中で“オソ”と呼ばれる罾猟に着目し、罾活動、捕獲数、罾場の空間的構造などからその実態を復元することを通して、江戸時代後期における罾猟の発達とその要因について明らかにした。罾場は、三面川本流、岩井又川を中心に猿田川、泥又川流域の尾根に分布する。罾師は各罾場の地形と植生の状況に応じてクマの移動ルート^{みくろ}を推定し、“タテオソ”（尾根に平行にかける罾）と“ヨコオソ”（尾根に垂直にかける罾）を組み合わせる。また罾活動は、このような罾を仕掛ける行動“オソキリ”と罾の見廻り行動“オソミ”から成り、各家で年に平均して1頭のクマを捕獲できる。さらに、各家が罾を設置する場所“オソバ”は定まっておき、他の家はこれを侵さないという暗黙の了解があった。

近世後期の戸数の変動と罾場との関係をみると、明治期以降戦前までの分家にオソバがないこと、またその当時の紀行文から、多くのクマを捕獲しクマの胆や菅むしろを村上藩に買い取ったこと、さらに米沢藩の副業奨励として三面のクマの胆や皮を挙げていることから、その当時クマ狩りが発達していたことは明らかであり、その中でも罾猟が中心であったと推察される。

I. はじめに

1. 研究の動向と目的

近世後期になるとクマの胆や毛皮の価値が高まり、いくつかの藩ではそれらを買ってあげて、罾師の生活を保護するようになったといわれる(森, 1940)。そのため、この時期に、狩猟を生業の一つとする狩猟集落¹⁾が、他の業態から移行して形成された(千葉, 1971)。例えば、秋田の狩猟集落では、越中黒部、越後、信州、上州藤原、秋田男鹿半島方面にまでクマ狩りを中心とした狩猟に出かけ、その土地のマガヤドに泊まっていたことは、よく知られている(高橋, 1937; 戸川, 1962; 武藤, 1969; 鈴木, 1828)。これには、秋田藩がマガギよりクマの胆を買ってあげて製薬し、他藩に販売していたという背景がある(森, 1940)。

しかしその一方で、明治期以前はクマよりもカモ

シカの方が狩猟対象として重要であり、クマは経済的な商品ではなかったともいわれる(千葉, 1977; 1986a, 1986b)。越後の実川や山形の五味沢(丹野, 1978)などの多くの山村がこれに当てはまる。

ところが、この時期にクマ狩りの中の罾猟を発達させた集落の事例報告がほとんどない。罾猟は、クマ狩りの中で最も古く、確実に捕獲できる²⁾ために、クマの胆や皮が商品化すると最も早く発達したと考えられる猟法である。また、罾猟を扱った研究では、三面、金目、檜枝岐、沢内などの山村で、罾の作り方(佐久間, 1976; 田口, 1984)、罾場の領域(板垣・宇井, 1979; 田口, 1983)、罾活動の実態(森谷, 1961; 佐久間, 1976, 1978)などを簡単に言及しているけれども、罾猟の発達した時期や罾場の空間的構造を明らかにしていない。

本稿では、クマの罾猟の分布を全国的に明らかにした後、罾猟が盛んに行なわれていた新潟県三面の罾猟の実態を復元して、それが発達した時期およびその要因を明らかにすることを目的とする。

* 東北大学・院

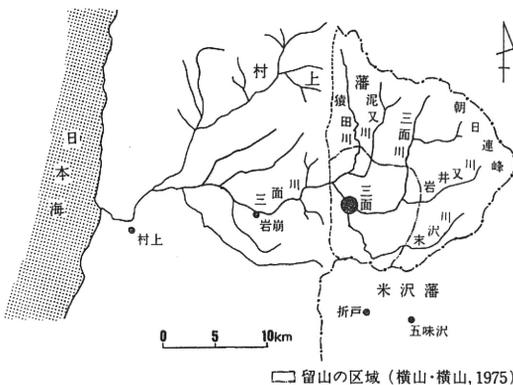
研究方法としては、古老への聞きとりから 1955 年以前の罾猟の実態を復元し、尾根すじに残存している重しとなる石の観察から、罾場の分布を地図化した。また近世後期のクマ狩りに関しては、紀行文を使用した。

2. 調査地の概観

越後村上藩領の三面は、村上藩の岩崩村から 5 里、米沢藩の折戸村から 2 里半の所に位置する、朝日連峰の山ふところに抱かれた集落であり(第 1 図)、平家の落人伝説のある狩猟集落³⁾として古くから知られている。

朝日連峰は、標高が 1500 m 前後と低いけれども奥深い山々である。その連峰を源にして日本海に注ぐ三面川を中心に、その支流の末沢川、岩井又川、猿田川が急峻な谷を刻んでいる。気候は日本海側気候で、冬期間の多量の積雪に特徴がある。集落での最深積雪量は、多い年で 3 m、少ない年で 1 m で、平均すると 2 m 前後になる。また、広大な山地には、急峻な谷底斜面を除き、ブナ・ナラを優占種とする落葉広葉樹林が広がる。そこには、ツキノワグマ、カモシカ、サルなどの大型・中型哺乳類が多数生息する。なお、この地区は、1970 年に奥三面ダムの建設予定地となり、その後 15 年にわたる補償交渉の末、1985 年 11 月にはすべての家が移転を行なった。

三面の住民は、クマ狩りやカモシカ狩りを通して、



第 1 図 地域概観図

このような自然と密接に結びついてきた。近世の初めに検地が行なわれ、その後三面川の河岸段丘上の新田開発が進み⁴⁾、三面も農耕社会の一部に組み込まれることになるが、広大な山地をくまなく利用する狩猟の伝統は続いてきた。例えば、天保元(1831)年 10 月には、狩猟に関する村決を行なっている。これは、集落を中心に約 4~6 km² の地区を村共有の留山にして、その区域内でカモシカを捕った場合、皮は村へ出し、肉はとった人が得ることにしたものである(横山・横山, 1975) (第 1 図)。

さて、狩猟にまつわる集団的儀礼に注目すると、三面においては、クマ狩りよりもカモシカ("アオンシ")狩りに関して、山の神信仰に基づく厳格な作法や戒律がみられた(森谷, 1961)。これは、"スノヤマ"と呼ばれ、山言葉も厳重に使われていたが、1934 年にカモシカが天然記念物に指定されるに伴い行なわれなくなった。一方、クマ狩りには、冬眠中のクマを捕る穴グマ狩りの"タテシ"、穴から出たばかりのクマを集団で包囲して捕る"デジトリ"、数百 kg もある石の重しを使ってクマを押しつぶす"オソ"の三種類の猟法があるが、いずれの場合もスノヤマのような厳格なしきたりはない(森谷, 1961)。

II. クマの罾猟の分布

クマを捕獲する罾は、寛政 11(1799)年刊行の『日本山海名産図会』に描かれている(平瀬・部, 1970)。それは"オン"と呼ばれるもので、つり天井の上に 300~400 kg の重しとなる石を載せ、その下に、ウサギ、鹿、カモシカの肉あるいは密蜂の巣などを餌としてつけておく。クマがその下を通り餌を採ろうとすると、天井が落ちてきてクマを押しつぶすしくみである。このオンは、紀伊山地⁵⁾、赤石山麓、岩手山麓などに分布していた(第 1 表)。

他方、餌を使わないでクマが必ず通る場所に仕掛ける罾猟は、"オソ"または"ヒラオトシ"と呼ばれ、東北地方の日本海側⁶⁾から北陸地方の山地にかけて

第1表 クマの異猟の分布と呼称

分 布 地		異猟の呼び名	出 典
秋田県	阿仁(根子, 比立内, 打当)	オッチョ, ヒラオトシ	阿仁町教育委員会(1970)
〃	上小阿仁村八木沢	ヒラオトシ	千葉(1977)
新潟県	朝日村高根	オソ, ヒラオトシ	千葉(1977)
〃	朝日村三面	オソ	森谷(1961)
〃	秋山郷	ヒラ, オス	鈴木(1828)
石川県	手取川上流域	ベタオトシ	水野・花井(1985)
岩手県	岩手山麓	ヒラ	田中(1933)
〃	沢内村貝沢	ヒラオトシ	千葉(1977)
〃	新里村刈屋	オシ	千葉(1977)
山形県	小国町金目	オソ	佐久間(1976)
福島県	伊南古町村	オソ	石川(1971)
〃	檜枝岐	オソ	金子(1937)
長野県	伊那谷の仙丈ヶ岳山麓, 小沢溪谷	オン	千葉(1975)
奈良県	天川村篠原	オン	千葉(1971)
徳島県		オス	平瀬・蔀(1970)
愛媛県		天井釣	平瀬・蔀(1970)

分布する。その理由は、多雪な気候と急峻な地形が組み合わさるこの地域では、山中にヒメコマツの自生するやせ屋根が発達し、そこをクマが移動するために、そのルートを予測できるからである。

異猟が、各集落でどの程度行なわれていたかは不明である。ただ、各地の山中に“オソバ”（千葉, 1975）や“クマのオス”, “オスがたお(峰)”（松山, 1977）などの小地名が残っており、異猟が盛んであった時代が以前にあったことを物語る。しかしながら、こうした地名からその時代を明らかにすることはできない。また、沢内村貝沢, 小国町金目, 朝日村三面, それに福島県檜枝岐では、異猟が各戸の財産権となっている。例えば、貝沢では、古くはそれぞれの家でヒラオトシをかける場所が決まっており、一つの権利となっていた（千葉, 1977）。檜枝岐では、異を仕掛ける場所を“オソバ”と呼び、その場所を最初に発見した人に対して一種の占有権があり、その権利の譲渡も行なわれた（早川, 1939）。また三面では、各個人のオソバの権利が決まっており、それを売買することもあったといわれる（千葉, 1977; 佐久間, 1978）。

本稿で対象とした三面集落においては、このよう

に異猟が各戸の財産権となるほどに異猟が発達していたといえよう。以下、三面における異猟の実態とそれが発達した時期を検討する。

III. 異猟の実態

近世後期における異猟の実態を直接示す資料はないけれども、大正期から戦後にかけてのそれは、古老からの聞きとりを通して復元することができ、近世後期の異猟の状況と類似していると考えられる。その理由は、異猟の方法にほとんど変化がなく、各家の異猟が家間で移動しているものもあるが、各戸が特定の地区を伝統的に利用してきたからである。本章では、クマの生態を考慮して異猟の分布を述べた後に、そこで展開される猟師の行動や異猟をめぐる社会的関係について述べる。

1. クマの生態と異猟の空間的構造

三面におけるニホンツキノワグマ (*Selenarctos thibetanus japonicus*)には、テレメーターを使用した行動追跡（テレメトリー法）は行なわれていないが、調査地域内に1 km²の方形区を設け、さらにその中心に半径50 mの円形区を設定し、その中の糞や足跡などのフィールドサインを記録する方法を通

して、クマの分布や生態が明らかになっている(丸山ほか, 1975)。

それによると、クマは集落の近くの人工林や2次林の地区よりも、ブナ・ミズナラ等の落葉広葉樹林が発達する地区に多く生息する。なぜなら、秋(11月)の重要な食物は、糞分析によって、ブナやミズナラの果皮であるとされているからである。その中でも11月に、ある特定の地区で2年連続して糞や足跡が発見されていることより、クマが頻繁に利用する地区が存在すると推察される。

なお、日本海側の山地に生活するクマの行動や生態は、石川県の白山麓や秋田県の太平山麓でテレメトリー法が使われ、しだいに明らかにされつつある(環境庁自然保護局, 1985; 秋田県自然保護課, 1986)。例えば、白山麓の尾添川流域のクマは、春から初夏にかけては明瞭なコアエリア⁷⁾を限定せずに広い範囲を移動しているが、秋になるとコアエリアへの定着傾向が強くなり、移動範囲は狭くなる(水野・野崎, 1985)。つまり、秋のクマは、同一地域内で短い距離を移動する滞在型移動を行なっている。

以上のようなクマの生態をふまえて、三面川本流の左岸に位置する利兵衛と幸右エ門の畏場、岩井又川の左岸を占める次右エ門のそれを事例として畏場の分布を検討する。1985年8月、10月の現地調査で畏場の位置を確認し、8千分の1の空中写真から現地の植生を判読することによって、地形や植生との関係を示したのが第2図である。

オソバは、標高200mから1000m近くに至る標高差800mの立体的な空間に広がり、地形的には沢と屋根、その間を結ぶ急斜面から構成される。また、川沿いの段丘状の地形にはブナ林("ブンノウ")が広がる。幸右エ門のオソバの場合には、道陸神から南西に伸びる山頂付近にもブナ林が卓越し、その間を結ぶ尾根上にはヒメコマツが散在、沢と屋根をつなぐ急斜面には小芝("シバツピラ")が広がる。

クマの行動は、このようなオソバの地形と植生の

影響を強く受けていると考えられる。猟師は、クマの習性を熟知してクマの通り道に畏を設置する。その場所は、幅が狭く両側が急斜面となっており、ヒメコマツが散在する尾根上で、"カタ"と呼ばれる平坦な地形面である(写真1)。次に幸右エ門と次右エ門を事例にして、より細部にわたって畏場の構造を検討する。

幸右エ門のオソバでは(第2図b)、畏をかける場所は、ヒメコマツが自生する"カミナガテ"と"ホンクラ"の尾根であり、一方ブナが自生する"シモナガテ"の尾根には、畏を設置していない。これは、シモナガテではクマの通り道が限定されていないので、それを予測しにくいと考えられる。また、先述したように、秋のクマは、ブナやミズナラの実を採食しながら遊動生活をしているので、採集地の間を第2図中の矢印の方向に移動していると思われる。猟師は、クマの歩く道を経験的に知っており⁸⁾、カミナガテに5箇所、ホンクラに3箇所の畏を、尾根に平行となるように設置する("タテオソを切る")。なお、この畏の中には、毎年あるいは1年おきにクマのかかる"おちる場所"が、カミナガテとホンクラに、それぞれ1箇所ずつある。

次右エ門のオソバでは、タテオソを5箇所に、ヨコオソを1箇所に切っている。ヨコオソは、尾根と垂直に交互するようにかかる畏である。この場所は、第2図(c)中の矢印の方向にクマが捕獲されていることから、クマがその下方斜面に広がるブナ林へ移動するルートとなっているものと推察される。

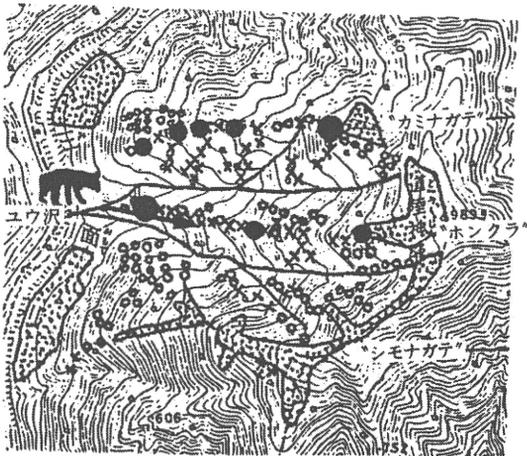
猟師は、各畏場の地形や植生の影響を受けるクマの遊動ルートに応じて、タテオソとヨコオソを組み合わせた畏の設置をしているといえる。その背景には、秋のクマが滞在型移動をするのでクマの移動ルートを推定しやすいということがあろう。なお、筆者は、畏場の中には毎年捕獲できる場所があることから、秋のクマが定着するコアエリアはあらかじめ決まっていて、猟師の見つけたオソバとある程度空



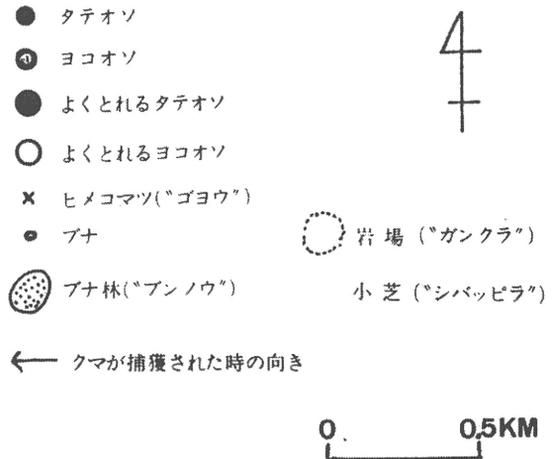
(a) 利兵衛のオソバ



(c) 次右エ門のオソバ



(b) 幸右エ門のオソバ



第2図 罾場の空間的構造

(オソの位置は、1985年8月・10月の現地調査により確認。植生は8千分の1の空中写真より判読)



写真1 罾を設置する尾根

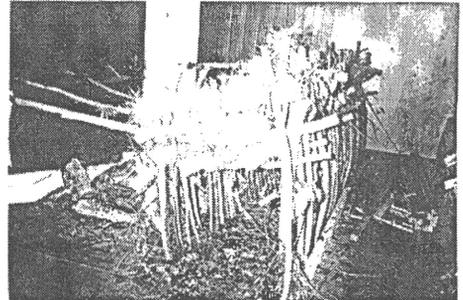


写真2 クマの罾

間的に対応しているのではないかと考えている⁹⁾。

2. 猟活動と捕獲数

罿猟は、クマの毛が抜けなくなる9月の彼岸¹⁰⁾から降雪が始まる前の11月中旬まで行なわれ、罿場へ接近して罿を仕掛ける行動“オソキリ”と、罿の見廻り行動“オソミ”から成り立っている。古老からの聞きとりに基づき、それぞれの行動を復元する。

小池幸右エ門氏は、早朝、集落から三面川をさか上り、ユウ沢の罿場へ向かう。約4時間の道のりである。罿場に着くと、まず、クマの通道の両側に10~12尺¹¹⁾(約3~3.6m)の長さにあわせて、細い芝を立てる(写真2)。次に、ブナの木は2~3年で腐ってしまうため、長期間使用できる松の木を使ってつり天井をつくる。そして、人のひじの高さになるようにつり天井と杭をフジヤブドウのついで固定し、つり天井の下に網を張っておく。その際にカモシカがオソにかからないように、つり天井の高さを低くする。最後に、重しとなる石をつり天井にのせて完成である(写真2)¹²⁾。なお、重しとなる石は、それぞれ手で持ってこれる程度の重さであり、尾根近くの斜面から集められる。総重量は「クマオソ100貫め(約400kg)」といわれた。例えば、ユウ沢のホンクラの1番高い所に位置する罿場で、重しとなる石の重量を測ってみると、15kg前後の大きい石が11個、8kg前後の中程度の石が28個、5kg前後の小さい石が21個で、合計すると約500kgの重さとなっていた。また、毎年同じ場所で罿をかけるため、材料となる松や石を何年も使うことができる。1枚¹³⁾の罿に2人がかりで約4時間を費やし、1日で2枚の罿を設置できるという。

罿の見廻り行動は、クマが罿にかかっているか否かを確かめる活動であり、7日から10日おきに行なわれる¹⁴⁾。その際に、一番北のカミナガテの尾根を歩くと、その対岸のホンクラの尾根の罿を見ることができ、罿がはずれていると、その場所の視界が明るくなっているという。

彼岸の中日にかけて罿には、クマがよくかかるといわれる。クマがとれるとキリハ(山刀)を使って心臓に十字を入れ、クマの解体を行ない、毛皮や胆をとりだす¹⁵⁾。そして、個人では運搬できないような大きなクマが獲れた時には、三面川の対岸に流れるヒヨガラ沢の入口に泊り、翌日、父親が迎えに来て、クマの運搬を手伝ったという。なお、クマが獲れない時の帰りには、猟期の最初の頃はマイタケ、その後ナメコやイワナを採ることもある。また、クマが1頭もとれない年もあるが、1年に2~3頭獲ることもあり、平均すると1頭程度である。よく獲れるオソでは、1~2年に1度は必ずとれたという。

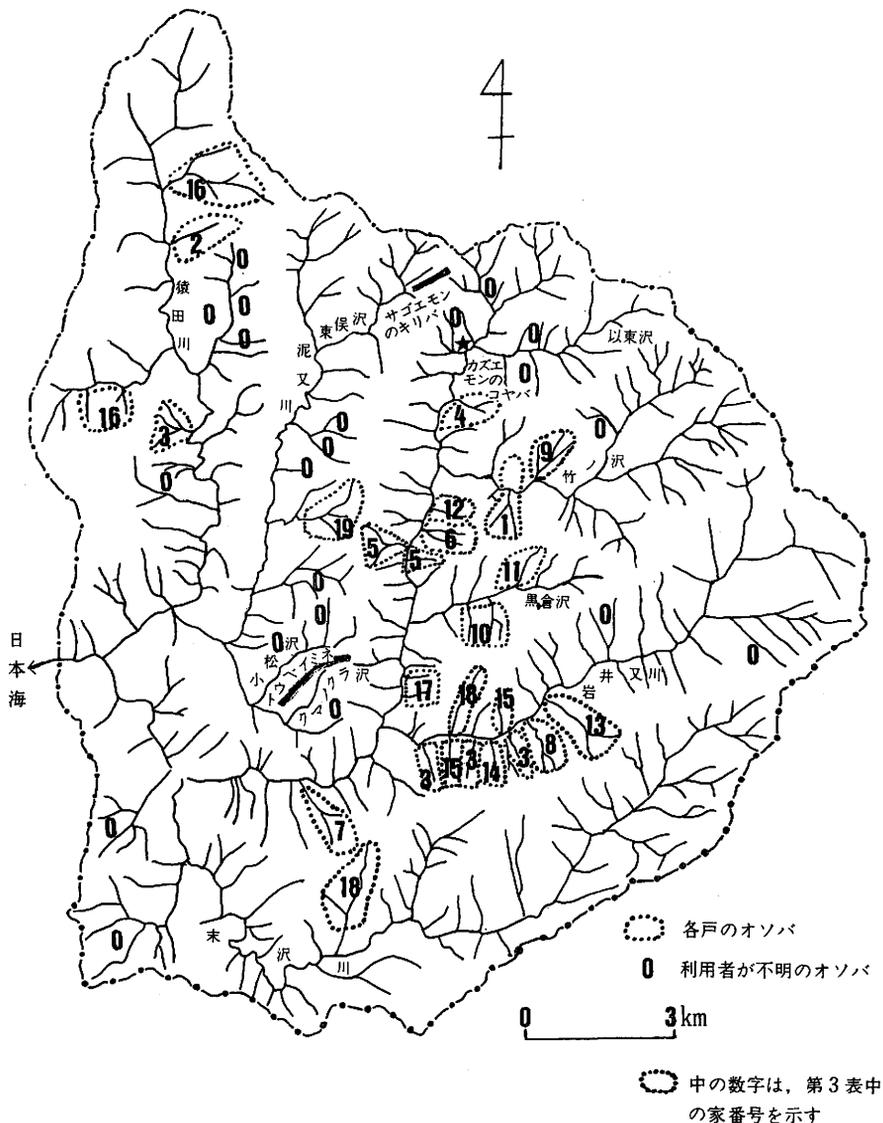
高橋源右エ門氏の場合は、1955年頃までの4~5年間にわたりヒヨガラ沢や長七沢で罿を行ない、5~6頭のクマを捕獲した。父親が5~6枚の罿をかけて、7~10日後に彼がオソミに行く。1シーズンに4~5回日帰りで見廻り、獲物がかかっていると泊る時がある。見廻りに行けば必ず1頭のクマを獲れるわけではないが、2回目の見廻りで2頭のクマを獲る時もある。まったく1頭も獲れない年もあるが、平均すると年に1頭ぐらいとなる。

小池義茂氏の場合は、1955年頃まで岩井又川のコワゾウ沢などで罿をかけていた。罿をつくるのに要する時間は、重しとなる石があれば2人がかりで半日かかるが、石がなければ沢から石を運ぶ時もあり1日かかる。罿の見廻り間隔は、7日に1度で、寒い時期になると10日おきになる。クマの捕獲数は、平均すると年に1~2頭¹⁶⁾であるが、多い年には3頭にもなる。

小池伝ノ介氏の場合は、小池貢氏のオソバである猿田川上流の小松倉でオソを切った。罿の見廻りは10日に1度行ない、朝早く家を出発して日帰りをするが、獲物がとれれば山で宿泊した。7箇所の罿の中でよくとれる罿では、毎年1頭のクマを捕獲できた¹⁷⁾。クマの捕獲数は、平均すると1年に1~2頭である。

第2表 罾猟による各家の平均捕獲数（聞き取り調査により作成）

家の名前	罾場	第3図中の番号	1年間における平均捕獲数(頭)	罾の数
幸右エ門	ユウ沢	6	約1	8
源右エ門	ヒヨガラ・長七沢	5	1	5~6
善茂	コクゾウ沢・ヤナギ沢	3	1~2	14~15
伝ノ介	小松倉	2	1~2	7
利博	ナタ倉	4	1	12~13
善康	大ヒド・小ヒド沢	17	約0.7	5
昭一	水上・オオヒド沢	15	0.5	6



第3図 各戸の罾場の分布（聞き取り調査により作成）

伊藤昭一氏の場合は、祖父(故伊藤栄吉氏)といっしょに岩井又川の水上沢とオオヒド沢で罝をかけた。罝の見廻りは2週間おきに行ない、その帰りにナメコやイワナをとることがある。オソキリをしたのは2年間だけであるが、1年目に1頭のクマを捕獲した。

高橋利博氏の場合は、12~13枚の罝をかけていれば少なくとも1頭は獲れ、多い年には2~3頭はとれるという。罝場の中には、毎年とれる場所があり、同じ罝場で一秋に2~3頭とれる時もある。昭和24~25年頃には、クマを1年で5頭とったこともある。また、彼の父親は「18歳の時から獲り始めて、65歳になるまでの約50年間に、45~6頭のクマをおさ(オソ)でとった。1期に6頭のクマを獲ったこともある。もちろん他のものと共同でやったのはこのほかである。自分1人で獲ったのである。」(横山・横山, 1975)つまり、父親は、年平均にすると1頭のクマをオソで獲っている。

以上のことから、重しとなる石が用意されていれば、2人がかりで1枚の罝を仕掛けるのに半日かかり、罝の見廻りは、7~10日おきに日帰りで行なわれる。また、戦前から戦後にかけての罝猟が衰退する時期ではあるが、第2表から各家で年平均すると約1頭のクマを捕獲できると結論づけられる。しかし、まったくクマを獲れない年もあり、罝猟が投機的性格をもつことに注目する必要がある。

3. 社会的慣行としてのナワバリ

大正時代から昭和の初めにかけての各戸のオソバの分布を通して、罝場のテリトリー化の現象をみてみる(第3図)。各罝場は、大正初期には6~7枚のオソから成り、16~17戸の家がオソをかけていたので(佐久間, 1978)、約120ヶ所のオソが設置されたことになる。一方、古老からの聞きとりによると三面の山の尾根には重しに使った石が残っていて、その場所は200カ所近くにわたる。

オソバは、三面川流域全体に広がり、中でも岩井



写真3 罝場の独占の利用を示す印

又川と三面川本流の上流部から竹ノ沢にかけての地域に集中的に分布する。一方、猿田川、泥又川、三面川上流の以東沢では、どこの家のものか判明できないオソバが多い。これは、こちらの地域では大正以前に罝猟が衰退したことを示す。例えば、伊藤勘一氏の場合¹⁸⁾、祖父が老齢で集落から遠くの罝場へ行けなくなったため、猿田川上流のジッバ沢からフスベ沢へオソバを変更したという。恐らくは、以東沢の罝場もまた集落から遠いために、その下流より早く衰退したと思われる。

このように、各家のオソバはそれぞれ固定していて、他の家は絶対にこれを侵さないという暗黙の了解があり、分家に出る時にオソバが分与された家があったといわれる。つまり、オソバの権利は、排他的な占有権として確立されたいた。筆者は、この慣行を「社会的慣行としてのナワバリ」と呼ぶ。また、大正時代から昭和の初めにかけての各戸のオソバの分布をみると、集落から離れた場所に利用者不明のオソバが多くみられ、また全戸が罝を設置しているわけではない。これは、罝猟が衰退した状況を示すと考えられる。つまり、罝猟の発達は大正期以前であったことになり、次章では、その時期を検討していく。

第3表 三面の戸数の変動状態

年号	寛政四 (一七九二)	文化四 (一八〇七)	文政六 (一八二三)	天保四 (一八三三)	天保一四 (一八四三)	弘化二 (一八四五)	弘化四 (一八四七)	嘉永二 (一八四九)	安政一 (一八五四)	安政二 (一八五五)	安政三 (一八五六)	安政四 (一八五七)	明治期から戦前まで	第3図中の襲撃の番号
大 炊 介	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	①
太 郎 作	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	②
次 右 門	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	③
利 兵 衛	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	④
源 藏	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⑤
左(木)右 門	○													
幸 右 門	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	⑥
甚 左 門	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⑦
次 郎 左 門	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⑧
庄 右 門	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⑨
孫 右 門	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	不明
よ 惣 左 門	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
八 左 門	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
八 右 門	○	○	○	○										
次 五 右 門	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⑩
八 郎 左 門	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	⑪
与 兵 衛	○	○	○	○										
次 左 門	○	○	○	○										
左 次 門	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
善 九 郎	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	×	
弥 五 右 門	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
茂 左 門	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⑫
次 郎 右 門	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⑬
甚 右 門	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
善 五 郎		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⑭
茂 太 郎		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⑮
勤 太 郎			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⑯
善 助			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⑰
利 右 門			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	不明
甚 左 平				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	⑱
伝 右 門				○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
助 次 郎					○	○	○	○	○	○	○	○	○	不明
太 七					○	○								
利 惣						○	○	○	○	○	○	○	×	
作 右 門							○	○	○	○	○	○	○	⑲
源 三 郎								○	○	○	○	○	○	不明
龍 音 寺	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
与 惣 左 門													○	×
八 兵 衛													○	×
政 右 門													○	×
善 吉													○	×
次 郎													○	×
藤 平													○	×

寛政4年から安政4年までは、小池巧之介氏が同家所蔵の事件発生別の人名簿から作成したものを一部修正した。欠印のある場合でも、次年次の充印があれば継続とみなす。明治期から戦前までと襲撃の有無は、聞き取り調査により作成。

IV. 近世後期における罽獺の発達とその要因

近世後期における罽獺の発達を、戸数の変動と罽場との関係、藩の政策とクマの商品化との関係の2つの視点から把握する。

1. 戸数の変動と罽場

寛政4(1792)年から安政4(1857)年までの三面における戸数の変動状態を、第3表で示す。集落の戸数は、寛政4(1792)年に24戸であるが、その後、勘太夫、善助、利右エ門、甚平などの新戸が増えて、天保4(1833)年から安政4(1857)年までの約20年間は、30戸前後の戸数で安定している。そして、安政4年に丸印のある家の大部分が現在まで存続する。

また、第3表で安政4年から現在までの家のオソバの有無を示した。この表から、江戸時代からの家は、占有的に利用するオソバを持っていたのに対して、与惣左エ門、八兵衛、政右エ門、善吉、次郎平、藤平などの明治期以降戦前までに形成された6戸の分家は、オソバを持っていないのがわかる。これから、三面で罽獺が栄んであった時代は、新戸が形成された江戸時代の末期以前ではないかと考えられる。しかし、各戸のオソバが形成された時期は不明である。また、絶家した家のオソバが、明治期以降の分家にひきつがれなかった理由は、次節で詳しく述べるが、村上藩や米沢藩によるクマの毛皮や胆の需要がなくなったために、明治期以降に罽獺が衰退したからと考えられる。

なお、泥又川上流の東俣沢には「サゴエモンのキリバ」、小松沢とクマノクラ沢の境にはトウベエが罽をかけたといわれる「トウベエミネ」、三面川の最上流と以東沢との分岐点には、罽獺に行った時の泊り小屋といわれる「カズエモンのコヤバ」などの罽獺に関わる地名が残っている(第3図)。しかし、これらの屋号はトウベエを除いて、近世後期の屋号にも明治から現在までのそれにもみられない。けれども、

時代を逆上ってみると明暦元(1655)年の検地帳には、佐五右エ門の名前がでていいる(池谷, 1986a)。また、トウベエも近世に絶家した家として、「朝日村の民俗」の中にみられる(岩本, 1978)。これらから、寛政時代よりさらに以前の近世前期から罽獺が行なわれていた可能性がある。

2. 藩の政策とクマの商品化

近世後期にクマ狩りが発達していたことは、寛政5(1793)年の佐藤中陵の「中陵漫録」と、文政10(1827)年の肥田野築村の「三面村記」からうかがわれ、そこから罽獺の発達を推察することができる。

米沢藩の本草学者である佐藤中陵は、上杉鷹山の命令を受けて、寛政5(1793)年の6月に、薬草を求めて三面を訪れ、次のようにクマ狩りの実態を報告している。「男子は深山に入て鎗にて熊を取る。熊胆及びその皮を村上に出して、年々の塩噌等その他諸の入用の品に代えて来る。1ケ年に熊三五十を獲ると云。是を貸して凡百金余に及。」

これから、住民はクマの胆や皮を村上まで運び、塩などの生活必需品と交換しているのが明らかである。そして、1ケ年に30~50頭のクマを捕獲して、およそ100金あまりの収益をあげている。しかし、この資料にはオソという言葉はみられず、鎗にてクマをとると書かれている。ちなみに、この頃のクマの胆の価格は、寛政4(1792)年には、千目耆メ付50文、寛政5(1793)年には、千目耆メ付耆メ、寛政11(1799)年には、千目耆メ付耆メ500文のように(小池, 1984)、7年間で急上昇している。

ここで、穴グマとりや巻狩りによって上述の頭数のクマが捕獲されたとすると、この時代以降に罽獺が発達したといえる。しかし、穴グマとりでクマのとれる確率は、3年間で部落共有の穴の1~2割にすぎない(池谷, 1986b)。しかも、古老¹⁹⁾からの聞きとりによると、穴グマとりでは多くとれても年に10頭以下だという。また、火縄銃のみが使われていた時代の巻狩りによる捕獲数は、1村落あたり4~5頭

といわれる(千葉, 1977)。さらに、三面で罾猟が盛んに行なわれていた頃、罾猟と穴グマとり・巻狩りの捕獲頭数比は2対1になっていた(佐久間, 1978)。

確かに、これらの解釈をめぐって問題は残るけれども、第3表より25戸の戸数と仮定すると、罾猟の平均頭数は年1頭なので集落全体で25頭となり、上述の捕獲頭数比を当てはめると、その半分の12~13頭はそれ以外の罾によるので、合計すると37~38頭となる。これは、1ケ年に30~50頭のクマを捕獲していたという佐藤の記述に当てはまり、この頭数の中にオソによるクマも含まれていたと推測される。

また、肥田野築村が、文政10(1827)年の三面の状況を報告している。これによると当時の三面は、戸数が28戸で、農業を中心に漁撈、狩猟も行ない、村上侯にクマの胆や菅むしろを貢いでいた。一方、かつての三面では、オソバに加えてスゲヤチも各家の財産であったと伝えられている。つまり、クマの胆は罾猟から得られたものとする、オソバからのクマの胆、スゲヤチで採集したスゲからつくる菅むしろに対応すると思われる。

さらに、三面は村上藩領に属するけれども、米沢藩の番所としての機能を持ち、上述の「中陵漫録」によると、寛政5(1793)年に20俵の米を米沢藩から受け取っている。そして、それより20年余り前の安永元(1722)年に、上杉鷹山は、米沢藩の財政を立て直すための一つの政策として小国の副業奨励をして、その中で三面のクマの胆と皮を挙げている(第4表)。この珍物が、米との交換品であったかどうか

は不明にしても、それは米沢藩に送られていたと推察される。

以上のことから、クマの毛皮や胆は、村上藩の領主への貢ぎものや米沢藩へ送る産品として、また生活必需品の交換物として重要な生産物であった。そして、クマの罾猟は、それらを得るために発達したと推察される。つまり、罾猟が発達した時期とその要因について次のようにまとめられる。住民が、クマの毛皮や胆を交易に使うことは古くから行なわれていたと思われる。しかし、米沢藩(1772年)や村上藩の政策が大きな影響をおよぼし、クマの毛皮や胆の価値が高まったことにより、3つのクマ狩りの罾法の中で確実にクマの獲れる罾猟が他の2つの罾法に比べて栄えになったと考えられる。すなわち、それが発達した時期は、村上藩の一部に三面がくみこまれた近世初期にまで逆上る可能性はあるが、寛政時代にみられたクマの胆の価格の上昇、またクマの皮の需要をもたらした米沢藩の政策の影響を強くうけて、近世後期に罾猟が発達したと考えられる。

V. まとめと今後の課題

本稿では、狩猟集落としてよく知られた新潟県三面を事例にして、クマ狩りの中でオソと呼ばれる罾猟の実態を復元し、江戸時代後期の罾猟の発達とその要因について述べてきた。その結果、以下のようなことが明らかになった。

クマの罾猟には、餌を使う「オソ」と餌を使わない「オソ」"ヒラオソ"がある。このうち後者は、東北地方から北陸地方にかけての日本海側の山村で用いられ、中でも調査地の三面では、それを設置する場所が各戸の財産権となっていた。

三面の罾場は、三面川本流や岩井又川を中心に、猿田川、泥又川流域にまで広がる。罾師は、各罾場の地形や植生を熟知し、クマの移動ルートを推定して、タテオソとヨコオソを組み合わせていた。ちなみに、この罾場は、秋のクマの行動域であるコアエリアに

第4表 小国の副業

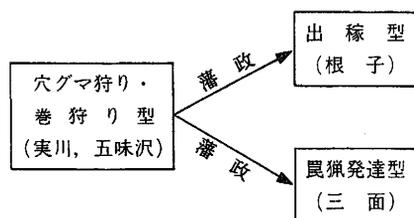
金	目	菅蓆座・舞蓆
五	味	沢
小	玉	川
折	戸	菅笠
石	滝	面桶
(遠来には)	三面	塗物
		熊の胆、皮

安永元年(1772)4月以来鷹山公副業奨励(小国町史編集委員会, 1966)により作成

当たっていると推察される。そして、具体的な猟活動は、罾を仕掛ける行動（「オソキリ」）と罾の見廻り行動（「オソミ」）から成り、各家で年平均すると1頭のクマを捕獲できる。さらに、各家が罾を設置する場所（「オソバ」）は定まっていて、他の家はこれを侵さないという暗黙の了解があった。

近世後期の戸数の変動と罾場との関係を見ると、明治期以降戦前までの分家にオソバがないこと、また、江戸後期の紀行文から多くのクマを捕獲し、クマの胆や管むしろを村上藩に貢いでいたこと、さらに米沢藩の副業奨励として三面のクマの胆や皮を挙げていることから、その当時にクマ狩りが発達していたことは明らかであり、中でも罾猟を中心に発達していたと推察される。

なお、本稿では、「罾猟発達型」の狩猟集落の事例を報告したが、冒頭で述べたようにこの他の狩猟形態には秋田マタギのような「出稼型」、あるいはその他多くの狩猟集落でみられる「穴グマ狩り、巻狩り型」があり、その地域的差異をひきおこした要因を明らかにすることが次の課題となるであろう。現時点では、十分な実証データを提示することはできないが、筆者の考えを予察的に述べることによって結びとしたい（第4図）。



第4図 クマ狩りからみた狩猟集落の発展類型
() は代表的な集落

元々、狩猟集落におけるクマ狩りは、経済的に重要ではなかったと思われる（「穴グマ狩り、巻狩り型」）。しかし、近世中期から後期に秋田藩、村上藩、米沢藩などの影響をうけて、クマの毛皮や胆の価値が高まる。それにともない、秋田の根子に代表される

「出稼型」の狩猟集落では、集落内でクマの生息する山地面積が小さいために集落外へ出掛ける必要があったのに対して、三面で代表される「罾猟発達型」では、山地面積が大きい（約3万ha）ために、集落内で猟場を拡大させる戦略をとったものと考えられる。つまり、狩猟集落における狩猟形態の地域的差異は、各地域のクマの生息頭数の大小、藩の政策などの影響を受けていると考えられる。

謝 辞

本稿は、1985年度人文地理学会大会における発表内容に加筆修正したものである。現地調査では、高橋利博氏、小池幸右=門氏、小池義茂氏など三面の多くの方々にお世話になった。また、石井利明、太田真也、南真木人（以上筑波大学院生）、有田英一（東北大学学生）の諸氏には、山中での調査に御協力頂いた。記して感謝申し上げます。なお、本稿は、文部省科学研究費助成（特定研究「生物の適応戦略と社会構造」代表・寺本英京都大学教授）を一部受けている。

(1987年7月14日 受理)

注

- 1) 狩猟集落は、クマ狩りやカモシカ狩りなどの狩猟を生業の一つとして、山の神信仰に裏打ちされた狩猟儀礼を伴う集落であると定義される。また、三面は、秋田県の根子とともに東北日本でもっとも古い狩猟者の集落とわられてきた（千葉，1975）。
- 2) 一般に罾を専門に使用する者は、安全確実で猟期が長いために、狩猟で生計を立てられるといわれる。また、千葉(1975)によると、記録にみる限り、クマ狩りのもっとも古いタイプは、日本ではオソあるいはオソを用いる方式だったようである。
- 3) 三面から五六十里離れた北秋田の奥に居る荒瀬根子のマタギたちが、この三面を知りかつこれを尊敬していたという（柳田，1937）。
- 4) 延享3(1746)年の三面村から村上城主内藤紀伊守信輝への明細帳によると、石高は、本田が約133石、新田が約27石となっている。
- 5) 天川村篠原では、クマのオソに狼がかかったこともある（千葉，1971）。
- 6) 北上山地の新里村刈屋の場合は、秋田から出稼に来た人がオソを行っていた（千葉，1977）。これは、北上山地において罾猟がその地区の伝統的な猟法では

- ないことを示す。
- 7) 食物、休息、隠れ場の三つの条件を備えた滞在地域（環境庁自然保護局、1985）。
 - 8) クマは、黒倉沢や竹ノ沢からユウ沢に来て、川沿いのブナ林で遊び、その後尾根に登ることが多く、ヒメコマツが自生する尾根に泊る（小池幸右エ門氏から聞きとり）。
 - 9) この問題を解くためには、テレメトリー法を使って、三面のクマの行動域を調査する必要がある。
 - 10) 秋の彼岸前にとったクマは、なめしても皮の裏が黒くなり、毛が抜けやすいのでとらない（森谷、1961）。また、夏のクマの胆は、乾燥しすぎてガサガサするし、肉もおいしくない（高橋利博氏からの聞きとり）。
 - 11) ユウ沢のホンクラの尾根で使われていた松の木の長さは、約3mであった。
 - 12) クマオソの作り方については、田口(1984)の報告が詳しい。
 - 13) 異の数は、1枚2枚と数える。
 - 14) クマは異にかかってから4~5日は悪くならない（佐久間、1978）。なお、西表島におけるイノシシ猟の見廻りでは、4~5日に1度、長くおいても10日に1度は出かける（今井、1980）。
 - 15) 岩手県沢内村では、秋のクマは胆が小さく、ことにオトシでとったものは胆の効能がすぐれず、他地域の半額で売買された（千葉、1971）。
 - 16) 小池義茂氏は、ひと秋に14~15枚のオソを切って、平均1~2頭のクマをとっている（田口、1984）。
 - 17) この場所は山の条件がよいので、毎年クマが集まってくる（小池伝ノ介氏からの聞きとり）。
 - 18) 明治43年生まれ。聞きとりによる。
 - 19) 18)と同じ。

文 献

- 秋田県自然保護課(1986)：ツキノワグマ生態調査報告書。秋田県。
- 阿仁町教育委員会(1970)：阿仁マタギの習俗。千葉徳爾(1971)：続狩猟伝承研究。風間書房。
- 千葉徳爾(1975)：狩猟伝承。法政大学出版局。
- 千葉徳爾(1977)：狩猟伝承研究後篇。風間書房。
- 千葉徳爾(1986a)：狩猟伝承研究総括編。風間書房。
- 千葉徳爾(1986b)：東日本の狩猟村落における野獣の意義。上野福男編著：日本の山村と地理学。農林統計協会、99~112。
- 早川孝太郎(1939)：福島県南会津郡檜枝村採訪記。民族学研究、5、550~597。
- 平瀬補世・薮 関月(1970)：日本山海名産図会。日本庶民生活史料集成10巻、三一書房。
- 池谷和信(1986a)：東北日本奥地山村における稲作と焼畑。(講演要旨)。東北地理、38、54~55。
- 池谷和信(1986b)：朝日連峰の山村におけるクマ狩りについて—タテンに着目して—。東北民俗、20、54~61。
- 今井一郎(1980)：八重山群島西表島におけるイノシシ猟の生態人類学的研究。民族学研究、45、1~31。
- 石川純一郎(1971)：民間狩猟の一形態—奥会津南郷村における狩人の生態と伝承—。日本民俗学、77、1~29。
- 板垣英夫・宇井 啓(1979)：マタギの里。渡辺茂蔵編著：羽越国境の山村奥三面。山形地理談話会、104~107。
- 岩本通弥(1978)：村と家のしくみ。朝日村教育委員会：朝日村の民俗II。287~310。
- 金子総平(1937)：熊狩雑記。アチックミュージアム。
- 小池巧之介(1984)：三面歳時記。山に生かされた日々刊行委員会編：山に生かされた日々。164~169。
- 松山義雄(1977)：狩りの語部。法政大学出版局。
- 丸山直樹・宮本雅美・常田邦彦・土屋典生(1975)：奥三面における哺乳類の分布・生態とこれにおよぼす奥三面ダム建設の影響。日本自然保護協会編：奥三面ダム建設計画に関する学術調査報告書。121~135。
- 水野昭憲・花井正光(1985)：手取川上流域におけるツキノワグマの狩猟形態とその変化。環境庁自然保護局：森林環境の変化と大型野生動物の生息動態に関する基礎的研究。環境庁、48~57。
- 森嘉兵衛(1940)：奥羽狩猟村落の研究—奥羽山村研究の一部—。社会経済史学、10、373~390、477~492。
- 森谷周野(1961)：三面郷の狩猟習俗。新潟県教育委員会：奥三面郷赤谷郷狩猟習俗調査報告書。3~98。
- 武藤鉄城(1969)：秋田マタギ聞書。慶友社。
- 小国町史編集委員会(1966)：小国町史。
- 佐久間惇一(1976)：羽前金目の狩猟伝承。あしなか、151、2~26。
- 佐久間惇一(1978)：三面の狩捕伝承。朝日村教育委員会：朝日村の民俗II。382~398。
- 鈴木牧之(1828)：秋山記行。秋山記行・夜職草。東洋文庫186。平凡社、1971所収。
- 田口洋美(1983)：山に暮らす日々。日本観光文化研究所。
- 田口洋美(1984)：オソ。山に生かされた日々刊行委員

会編：山に生かされた日々，112～115。
 高橋文太郎(1937)：秋田マタギ資料，アチックミュージアム。
 田中喜多美(1933)：山村民俗誌，一誠社。
 丹野 正(1978)：東北地方山村における狩猟活動—とくにクマ狩りを中心に—，今西錦司博士古稀記念論文集，探検・地理・民俗誌，467～494。

戸川幸夫(1962)：マタギ—狩人の記録—新潮社。
 山口弥一郎(1942)：東北地方に於けるマタギ集落の機構とその変遷，地理評，18，99～128。
 柳田国男(1937)：山立と山臥，筑摩書房，柳田国男全集第31巻所収。
 横山貞裕・横山秀樹(1975)：越佐歴史物語，新潟日報事業社。

Changes in Bear-Trapping in Miomote, the Asahi Range

Kazunobu IKEYA*

The purpose of this paper is to clarify the development and the cause of trapping black bears (*Selenarctos thibetanus japonicus*) in the late *Edo* period. Miomote in Niigata Prefecture was famous for the hunting settlement where bear hunting is economically and religiously important to village life. The hunting activity, the number of bears caught, and the spatial structure of the trapping areas were researched.

The present writer interviewed the old people of Miomote about the practice of bear-trapping in the early *Showa* period, and mapped the distribution of trapping areas of that period by his observation of stones remaining on rides which used for trapping.

The results can be summarized as follows.

1) There were two methods of bear-trapping. The *Oshi* technique used a bait, but the *Oso* or *Hiraotoshi* technique did not. The latter was used by mountain villagers in Tohoku and Hokuriku facing the Japan Sea. People had exclusive trapping rights in particular areas of nationally owned forests.

2) The trapping areas were distributed on the ridges along the valleys of the Miomote, Iwaimata, Saruta, and Doromata Rivers. Hunters guess the movement of bears in accordance with the circumstances of landform and vegetation in each place, and trap. There are two main hunting activities, first setting the bear traps, and then going around to check their catch. Each family can catch one bear per year on the average. The hunting area for each family was determined by mutual tacit agreement in which one person wouldn't intrude into another's space.

3) The present writer examined the relationship between changes in the number of houses and in the trapping areas. Bear hunting was very successful in those days. A lot of bears were caught and they supported the Murakami-han in the form of bear galls (a kind of medicine) and sedge mats, and the Yonezawa-han officials ordered the villagers to produce the galls and skins under the policy of encouragement of side jobs.

* graduate student of Tohoku University